

「地球と宇宙の文化心理学」連載趣旨

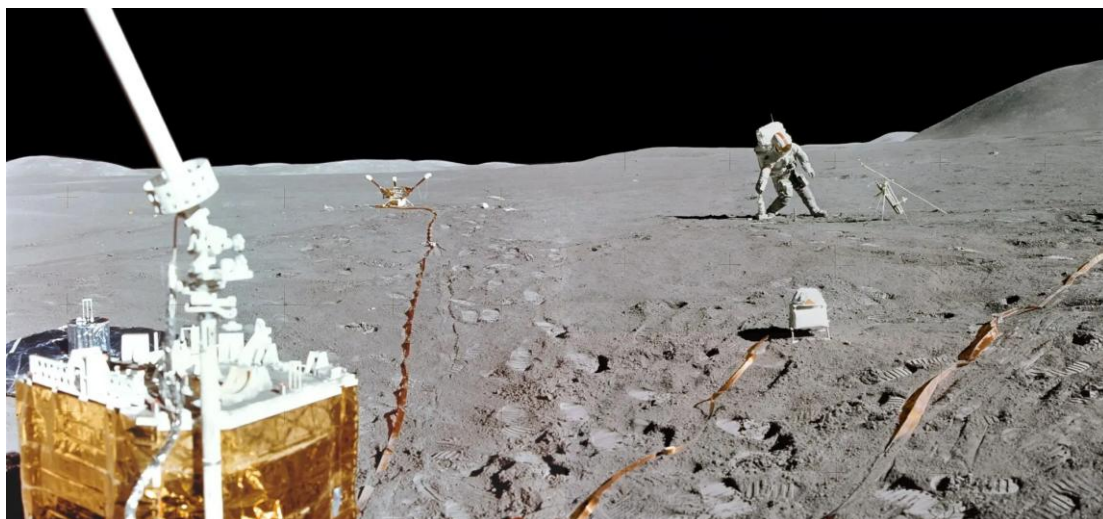
土元哲平（立命館大学）

本連載では、来るべき宇宙移住の時代に向けて、「人がいる場所」や「暮らしの場」としての宇宙について思考することを目的とする。これまでの宇宙探査においては、生命維持の問題が主たる関心として前景化されてきた。これは、宇宙空間における探査が極限的な状況に置かれ、そもそも生存そのものが困難であるためである。しかしながら、現代において有人での月面探査が改めて注目され、現実味を帯びてきたことで、私たちは宇宙空間における暮らし、すなわち「ただ生きる」ことを超えたライフ（生命・生活・人生）の在り方について考えざるを得なくなった。

筆者は文化心理学およびキャリア教育を専門とし、これまで「キャリアの転機」に関心を寄せてきた(土元, 2020, 2022)。さらに、近年では、「庭」(Tsuchimoto, 2023, 2024)や「離島教育」を通じて、普段は意識されにくいものの、発達や意味生成に深く関与する「文化化された自然」の意義を探究してきた。2025年度からは、立命館大学・地球宇宙探査研究センター（ESEC）に所属し、文化心理学的な宇宙研究に取り組んでいる。

月と地球とはどう違うのであろうか。そこで真っ先に浮かんだのが、風土の問題だった。たとえば、筆者の故郷である鹿児島島の桜島、京都を囲む山々、琵琶湖、あるいはスイス・ヌーシャテルから望むアルプスといった自然が、その近隣に暮らす人々に何らかの影響を与えないはずがない。そうであるならば、宇宙空間にはどのような「自然」が存在しているのか、あるいは今後広がっていくのか。この問いを、本連載の出発点としたい。

対人援助は、単に物理的な行為にとどまらず、自己と世界との複雑な関係性において立ち現れる営みである。本連載では、人間にとって異質な世界との出会いがライフにどのような影響を及ぼすのかを検討する。こうした探究は、将来的に宇宙で生活する人々だけでなく、対人援助に関わる人に対しても新たな視座を提供する可能性がある。



出典：NASA

第1回 庭からホームへ ——地球的な人間は、いかなる「自然」と出会うのか？

土元哲平（立命館大学）

連載第1回では、宇宙という未知の空間において、いかにしてホームを感じ、また築くことが可能かについて、「庭」という概念を通じて文化心理学的に考察する。なお本稿は、2025年5月24日から25日にかけて愛媛県松山市にて開催された「TEAと質的探究学会 第4回大会」において行った発表をもとに再構成したものである。

はじめに一ホームの感覚と環世界

月面探査および移住・定住をめぐる世界的な競争が激化する中で、「月を『暮らす場所』としていかに考えるか」という問いが生じている。この問いは自然科学にとどまらず、文化的意味づけや、地球という惑星におけるホーム(home)感覚といった、人文・社会科学にも関係する問題でもある。ここでいうホームは、特定の場所を「自分の内側にある」と感じる深い内的な感覚である。たとえば「鹿児島は私のホームだ」「TEA学会は私のホームだ」といった表現がその例にあたる。

このようなホームの感覚は、私たちの、ある場所に対する過剰決定(over-determination)を通じて生成されると考えられる(Valsiner, 2007, 2014)。私たちは、ある種の場所を、それ自体は単なる物理的空間にすぎないにもかかわらず、神聖なものであったり、自身の存在にとって意味深いものとして捉えることがある。たとえば、私はある時テレビ番組でポンペイの特集を見たときに、故郷の鹿児島のことをふと思い出し、「これは(火山灰に一瞬にして埋め尽くされるのは)他人事ではない」と感じた経験がある。図1、図2の写真は、イタリア・ナポリのベスビオ火山であるが、私はこの火山のかたちや雰囲気と、鹿児島の象徴である桜島(図3)との間に、そして、ポンペイで生きてきた人の感覚と私が生きてきた感覚との間に親近感や類似性を見出したのである¹。すなわち、火山がある風景を単に視覚的に捉えるのではなく、そのような自然から、「私の故郷」という象徴的意味、物語、個人史といった複雑な結びつきが生まれてきた。いわば、特定の「場所」や「風景」は、深い存在論的次元において自己を形作っている。ホームの感覚を理解するためには、人が外界に対して独立ではなく、そこに対して主観的・感情的に移入していること(feeling-into; Einfühlung)が重要である。

¹ なお、鹿児島は古くから東洋のナポリと呼ばれており、その風景の類似性から、ナポリと姉妹都市を結んでいる(鹿児島市, 2021)。



図 1 イタリア・ベスビオ火山



図 2 イタリア・ベスビオ火山（ポンペイ遺跡からの見え）



図 3 日本・鹿児島県の桜島

このように、人が感じるホームは、その人が生きてきた意味のある環境との深い結びつきがある。こうした、主体にとって意味のある「場所」「環境」「自然」を表現する語として、「環世界」(Umwelt) (Uexküll, 1909; ユクスキュル・クリサート, 2005)がある。環世界とは、有機体(生きているシステム)にとっての記号論的世界を指す(Kull, 1998)。記号化とは、有機体はその世界を意味のあるかたちで一般化し、自己の内部に選択的に取り入れる過程を意味する。このように形成される環世界は、変形・修正された主観的な環境であり、必ずしも物理的な環境とは一致しない。したがって、物理的にその場から離れていても、その環境を想起することができれば、「ホーム」を感じることは可能なのである。

庭としての月、ホームとしての月

ここで庭という概念を導入し、月や火星への移住を「自然の文化化」として捉えてみたい。庭とは、概念的には、意味深く、象徴的であり、かつ身の回りに存在する「文化化された自然」と定義できる。日常的な経験としての庭は、自然(例:雑草の繁茂や予期せぬ植物の生長)と文化(例:剪定や景観の構築)とが交渉する舞台であるといえる。

では「文化化された自然」とは何だろうか。私たちは、自然のあらゆる側面——たとえば身体、食べ物、海、山、月といった存在——を、単に「あるがまま」に知覚しているのではない。むしろ、そうした自然を作り変えたり、意味を付与したりすることを通じて、自らのライフ(生命・生活・人生)を構成しているのである。自然に意味を見出すからこそ、「風景」を楽しむことができるし、「海を眺める」だけの時間を過ごすことができる。人間の発達においても、この自然の文化化は重要な側面をなしている。すなわち、私たちの「自然な」発達は、個人の内的プロセスだけでなく、家族や制度といった外的な力によってガイドされ、あるいは制限されながら進行するが、その全体は決して人為的にコントロールするものではない。極端に言えば、私たちが認識するあらゆる自然は、すでに「文化化」されたものである。たとえ「自然体験」や「森林浴」といった活動によって触れる「手つかずの自然」であっても、それを認識した瞬間から、私たちはそれを歴史的・文化的な枠組みによって理解し、構成されたものとして経験することになる。

ここで指摘したいのは、月が私たちにとって庭のような存在であるという点である。歴史的に見ても、月は神話、昔話、日本の俳句などにおいて象徴的な自然として表現されてきた。たとえば、NASAによる月探査計画「アルテミス計画」では、月の女神アルテミスの名が象徴的に用いられている。また日本においては、月のかぐや姫のホーム、すなわち帰還すべき場所として描かれ、現世から遠く離れた手の届かない場所とされてきた。言い換えれば、月は長きにわたり、地球から眺められる庭として存在してきたのであり、「そこにあるが、届かない」という性質が、その象徴的意味をかたちづくってきた「文化化され

た自然」であった。そして今、私たちはその月を、新たなホームとして想像し、構想し始めている。このような転換の構造は、かつて大航海時代に見られた植民地主義的支配の構図と類似しているとも考えられる。

月にホームを築こうとする過程は、まさに人間存在の分岐点に位置している。例えば、たとえばハンナ・アレントは、宇宙進出という「垂直のまなざし」の獲得が、「人間の条件」から人類を切り離し、最終的には自己破壊へと向かう可能性があることに警鐘を鳴らしている（アレント, 2023; 松谷, 2019）。つまり、地球を抜け出すべき「牢獄」とみなし「より上へ」「より神の視点へ」という視座で宇宙を目指すことは、人間を人間たらしめている「自然の仲間と結ぶ最後の紐帯」（アレント, 2023, p. 17）を断ち切る傾向につながっているという。ここで重要なのは、私たちが月にホームを築こうと試みるとしても、最終的には生の条件としての「地球」の存在を再認識せざるを得ないという点である。宇宙進出という営為を通して、私たちと深く結びついた地球を逆照射的に省察し、自然とともに生きることの実存的な意味をあらためて理解すること。そこにこそ、人間のライフを深く捉え直すための新たな可能性が開かれていると考えられる。

庭とホームの深い関わり

さて、月のホームについて考察する上で重要なのは、庭がホームと外界との境界域にあるということである。この考えは、ヴァルシナー（2014）が提案した「I⇌Me⇌World」の関係づけのスキームから着想している（図4）。この図において、「I」は、主体として感覚される自己を、「Me」は客体として対象化された自己を指す。ヴァルシナーは、「I⇌Me」という内的な相互の関係づけと、「Me⇌World」という外的な相互の関係づけという二重の過程が文化であると論じている（プロセスとしての文化）。

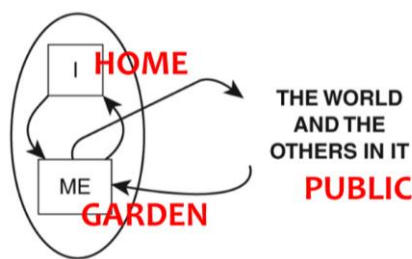


図4 「I⇌Me⇌World」の関係づけのスキーム（Valsiner, 2014）

このスキームは、「ホーム⇌庭⇌外界」という関係にも応用可能である（図5の赤字部分）。私たちがホームを理解しようとする際、その内的かつ複雑な意味に直接到達することは困難であるが、庭という「あいだ」の空間を探究することを通じて、その感覚に接近することが可能になる。つまり、庭にかかわる個人的・内面的な意味に注目することによっ

て、ホームという概念への理解が深化すると考えられる。そこでこのような庭を考察する一助として、私の庭に関する短いオートエスノグラフィー的な省察を試みたい。

鹿児島から大阪へ移った際、私は都市の風景に囲まれるなかで、「自然に囲まれている」という感覚を喪失していることにふと気づいた。その気づきには、かすかな不安が伴っていた。かつて私は、「桜島の灰が嫌いで、鹿児島など早く出たい」と思っていた。しかし今では、飛行機から桜島の姿が見えると、「帰ってきた」「ただいま」という感覚が自然と湧き上がってくる。引っ越しという経験を通して、私の庭であった桜島―すなわち、故郷の自然―を失ったとき、私は初めてホームを実感したのだった。

このような感覚的な気づきを契機として、私は宇宙という庭の意味を探るようになった。仮に私が月で生活することになり、ふと、「夕焼けがきれいだ」と思えなくなったら、「冬のにおい」がしないことに気づいたら、私はどう感じるのだろうか。火星のような真っ赤な砂漠に囲まれた中で、私はいったい何を眺めて生きていくのだろうか。

月一岩に囲まれた灰色の荒涼とした風景のなかに立たされたとき、私は直感的に、地球の自然がいかに多様であるかに気づく。そしてすぐに、自分が生きてきたのは地球全体ではなく、あくまで「私の」自然であったことを思い出させる。砂漠で生きたことも、湖のほとりで生きたこともない。私は桜島のような山の近くで生きてきた。月の上空に輝く地球が、私たちを取り巻く自然のひとつになったとしたら、私たちは地球をこれまでと異なる形で、どう象徴化するのだろうか。

以上のオートエスノグラフィーにおいては、意味ある自然―庭の喪失感とともに、新しいホームに対する意味づけが立ち上がってきた。このような庭の喪失とホーム感情の創発は、個人的な経験にとどまらず、宇宙空間において宇宙飛行士が経験する存在論的体験としても捉え直すことができる。

宇宙から地球を見る：俯瞰効果という存在論的経験

「自己―外界（自然）」の関係性を捉え直すこのような情感的経験は、政治的・経済的な次元を超えた存在論的次元に属しており、「俯瞰効果（overview effect）」と呼ばれる現象と深く関係している。俯瞰効果は、宇宙飛行士が宇宙から地球を眺めたときに生じる現象であり、その人の自己―他者の関係づけのあり方に深い価値転換をもたらす。このような深い経験を、アポロ 14 号の宇宙飛行士として月面を歩いたエドガー・ミッチェル（図 5）は次のように表現している。

私が窓から見たものは、これまで私の知っていたことすべて、私の愛したり憎んだりしたことすべて、憧れたことすべて、ずっとそうだったしこれから先もずっとそうだろうと、かつて私が考えていたことすべてだった。すべてがそこに、あの脆い小さな天体上であって、宇宙（コスモス）の中に浮かんでいた。このとき私は、**歓喜をともなう崇高な瞬間的語り（エピファニー）**を経験した。…[中略]…あの瞬間以来、私の人生は根本的に異なる行路をたどることになった。地球へ帰還するあの三日の旅程で私が経験したことは、**宇宙の“結合性（ユニティ）”**という圧倒的な感覚に他ならない。…[中略]…私は宇宙を、ある意味で意識体として感知した。この考えは巨大すぎてその場で言い表せないように思えたが、今でもおよそ表現することは不可能だ。（ミッチェル, 2010, pp. 11-12: 強調は著者）



図5 月面上で地図を確認するミッチェル（出典：NASA）

俯瞰効果には、畏敬の念や自己超越が伴うとされる(Yaden et al., 2016)。重要なのは、自己と世界との関係性への気づきが、エピファニーと形容されるような、劇的な顕現の瞬間として生じることである。「ブルー・マーブル」という宇宙からみた地球の姿は、まさにアポロ計画によってもたらされた「俯瞰効果」の象徴であり、国境を超えた人類および地球との統一性（unity）を認識する契機となった。こうした地球の姿は「宇宙船地球号」という表現を生み出し、「かけがえのない地球・生態系を守る」というエコロジー運動のきっかけにもなった（図6）。



図6 アポロ17号が撮影した「ブルー・マーブル」(the blue marble) (出典：NASA)

「俯瞰効果」という言葉を創出し、宇宙飛行士へのインタビューを検討したホワイトは、ミッチェルの語りをもとに、次のように指摘する。

例えば、この宇宙飛行士の発言は、軌道上や月面にいるうちに、彼らのナショナリズムが薄れ、人間であること (humanity) をひとつの全体的なシステムとして認識するようになったことを示唆している。同時に、宇宙の広大さは、人間であることが宇宙の他のすべてと異なる存在であることを彼らに想起させた。彼ら自身のアイデンティティの感覚の変化は、彼らが考える「自己」と「他者」の変化であった。...[中略]... 多くの人々は、主要な「他者」を神と考えているが、これは人間が数千年にわたって抱いてきた経験である。宗教をあまり信じない人にとっては、宇宙が主要な「他者」であり、宇宙とその燦然たる輝きは神の力の現れだと考える人もいるだろう。宇宙飛行士たちが宇宙で感じられたことは、その体験の力と、それまでの生き立ちが組み合わせり生まれたものと思われる。彼らはみな、スピリチュアルな表現を用いたり、科学的な用語を用いたりしながら、これまで人間が経験したことがないことの説明を試みたのである (White, 2021, Chapter 10)

宇宙飛行士の語りが示しているのは、私たちが宇宙空間という「異なる自然」と出会うことによって、かつての「自然」とのつながりが断ち切れたとしても、なお新たな「自然」との関係性を求め続けているという点である。宇宙飛行士の「言語化」の限界を超えた経験は、ヴァルシナーがいう「更一般化された情感的な記号領域」(hyper-generalized affective semiotic field) の発生そのものである。更一般化とは、その人の精神を超えた複

雑で情感的な記号が、急速に精神全体を圧倒することをいう。宇宙から地球を見ることは、映像や写真とは異なり、生身で地球と向き合う現実性を持っている。これは単に視覚的に眺めるだけのものではなく、「宇宙服の内と外で生と死がせめぎ合う」すさまじい緊張感も伴う(野口 & 矢野, 2020, p. 107)。このような美的な遭遇は、個人の主観的感覚を圧倒し、「自然」との新たな出会いへとつながっていくのだろう。

おわりに一月にホームを築くことは、私たちに何を問うのか？

こんにち、地球は、いつかは出ていくべき「揺籠」から、出ていってもいずれ帰ってくるべき「家」(ホーム・プラネット)として描かれるようになった(呉羽, 2019)。しかし、重要な点は、ホームとは単なる物理的空間ではなく、第一に感覚であるということである。また、ホームとは、私たち一人ひとりの「文化化された自然」との関係性のなかで生成されるものである。このホームという感覚は、あまりに深く私たちのライフ全体に浸透しており、ふだんはそれを認識したり、言語化したりすることすらないだろう。

では、私たちが月に移住したとき、そこにホームを感じることはできるだろうか。おそらく、それは容易ではない。最初に創出されるのは庭、すなわちホームと外界とのあいだに位置する空間であると考えられる。さらにいえば、生と死のせめぎ合う境界において築かれる「居住施設」は、ホームとは何かを、私たちに強く問いかけることになるだろう。月面にホームを構築することは、月面という新たに出会う世界の内化と、「地球的な存在」である私たちが経験してきた世界の外化という二重の過程である。このような過程を通して、ホームは新たに意味づけられ、再構築されていく。

このような過程は、単に生存条件を整えるための営みにとどまるものではなく、むしろライフそのものを再組織化し、人間性を省察し、再定義することを促す。このように、月をホームとする営みは、私たちが何を「自然」と感じ、ライフをどのように意味づけるのかを問い直す、きわめて人間的な試みとして浮かび上がってくる。

参考文献

- アレント, H. (2023). *人間の条件* (牧野雅彦, 訳). 講談社学術文庫.
- 鹿児島市. (2021). ナポリ市 (イタリア). 鹿児島県ホームページ.
<https://www.city.kagoshima.lg.jp/soumu/shichoshitu/kokusai/shise/kokusaikoryu/kyodai/naples.html>
- Kull, K. (1998). On semiosis, Umwelt, and semiosphere. *Semiotica*, 120(3-4), 299-310.
<https://doi.org/10.1515/semi.1998.120.3-4.299>
- 呉羽真. (2019). 人が宇宙へ行く意味. *人類はなぜ宇宙へ行くのか* (シリーズ〈宇宙総合学〉3) (pp. 117-136). 朝倉出版.
- 松谷容作. (2019). 宇宙から地球をながめる. *國學院雑誌*, 120(12), 1-19.

- ミッチェル, E. (2010). *月面上の思索* (前田樹子, 訳). 株式会社めるくまーる.
- 野口聡一・矢野顕子. (2020). *宇宙に行くことは地球を知ることー「宇宙新時代」を生きる* (林公代, 取材・文). 光文社.
- 土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 立命館大学大学院文学研究科 博士論文.
- 土元哲平. (2022). *転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー*. ナカニシヤ出版.
- Tsuchimoto, T. (2023). Exploring the “Garden Metaphor”: An Inter-Modal Autoethnography. In M. A. Campill (Ed.), *Re-Inventing Organic Metaphors for the Social Sciences* (pp. 137–157). Springer Cham.
- Tsuchimoto, T. (2024). *The Semiotic Field of the Garden: Personal Culture and Collective Culture*. Infomation Age Publishing.
- ユクスキュル J., ・ クリサート G. (2005). *生物から見た世界* (日高敏隆・羽田節子, 訳). 岩波文庫.
- Uexküll, J. von. (1909). *Umwelt und Innenwelt der Tiere*. Berlin: Verlag von Julius Springer.
- Valsiner, J. (2007). *Culture in Minds and Societies: Foundations of Cultural Psychology*. SAGE.
- Valsiner, J. (2014). *An Invitation to Cultural Psychology*. SAGE.
- White, F. (2021). *The Overview Effect: Space Exploration and Human Evolution (4th Ed.)*. Multiverse Publishing. (Kindle Ed.).
- Yaden, D. B., Iwry, J., Slack, K. J., Eichstaedt, J. C., Zhao, Y., Vaillant, G. E., & Newberg, A. B. (2016). The overview effect: Awe and self-transcendent experience in space flight. *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice*, 3(1), 1–11.